

風流踊りにみる音楽

講師：出口 実紀先生

(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 非常勤講師)

令和元年 9月28日(土) 於：草津宿街道交流館

今回は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 非常勤講師の出口 実紀先生に「風流踊りにみる音楽」と題してご講演いただきました。出口先生のご専門は音楽学で、各地の民俗芸能における音楽面の研究に取り組んでいらっしゃいます。今回は当館の開館20周年記念展【民俗編】「くさつを彩る舞～風流踊りの系譜～」に寄せて、この展示の大きなテーマである「風流踊り」における音楽に着目したお話をして下さいました。



まず、「風流（ふりゅう）」とは何なのでしょう。『日本国語大辞典』によると「祭礼の行列などで、服装や笠に施す華やかな装飾。芸能の一種。華麗な仮装をし、囃し物を伴って群舞した、中世の民間芸能。また、その囃し物。」とあります。また「風流踊り」については、『日本史大辞典』には「趣向をこらした扮装の者たちが、集団で笛・太鼓・鉦（かね）・鼓などの伴奏にあわせて踊る踊り。」とあります。

つまり「風流踊り」は、“華やかな仮装をした人々がお囃しに合わせて踊った中世の民間芸能”と言えます。そして、この風流踊りの系譜をひくとされる民俗芸能が、草津市内にはたくさん伝承されているのです。

その中の1つである「草津のサンヤレ踊り」は市内の7地域にそれぞれ伝承されています。先生が教えて下さった草津のサンヤレ踊りの特徴は、まず「楽器編成が豊富であること」です。7地域全ての踊りで太鼓・鉦、ほぼ全ての地域で笛が使われており、他に、摺りササラ・鞆鼓・鼓を使用する地域もあります。歌い方にも特徴があり、「シラビック*1」な歌い方であることも特徴であるそうです。また、太鼓を打つ人と太鼓を持つ人に分かれる「太鼓打ちと太鼓受け」の芸態も特徴の一つであるそうです。

一方、奈良県十津川村にも風流踊りの系譜をひく、「十津川の大踊」が伝承されています。こちらは盆踊りの中に見られる踊りで、お囃子が初めはゆったりとしています。だんだん早くなっていくという特徴があります。また、踊りの一行の構成は、音頭取り・踊り手（女性）・道化（バケ）・切籠燈籠持ち、そして草津のサンヤレ踊りにも共通する太鼓打ちと太鼓受けに分かれて踊られます。さらに、歌い方がシラビックでリズムカルであり、この点も草津のサンヤレ踊りと共通しています。

逆に、岐阜県揖斐川町に伝わる「太鼓踊り」では草津のサンヤレ踊りとの共通点はあまり見られません。楽器編成は太鼓・鉦・笛であり、太鼓は踊り手が体に付けており、これ

を打ちながら踊り、笛の吹き手は歌も兼務します。歌はなんと 30 曲ほどもあり、シラビ
ックな曲もありますが、「メリスマティック*2」な曲も混在しています。

このように、「風流踊り」は使われている楽器やその割り当て、歌い方の特徴などに共
通点や相違点があることが分かります。これまでに風流踊りをたくさん見てこられた先生
によると、「音楽的にみると類似性や違いがありすぎるため、それらを分類するには膨大
な時間がかかることから、現段階では、風流踊りとは多様であるとしか言えない」とのこ
とでした。発祥時の各地域の事情や、現代までの伝承の過程で変化があったのかもしれな
いですね。

講座では実際の踊りの映像が流れ、そのお囃子や歌、踊りによってとても風流な雰囲気
を味わえました。皆様もぜひ、各地に伝わる風流踊りをご覧になってみてはいかがでしょうか？

(文章：草津宿街道交流館)

*1 シラビック…短い詞章と 1 音節に 1 音符を当てはめる

*2 メリスマティック…1 音節に多くの音符をあてる